八ヶ岳南麓を代表する縄文集落、16年ぶりの調査！

北杜市長坂町
山梨県畜産酪農技術センター長坂支所

酒呑場遺跡は、これまで4回にわたる発掘調査を実施しており、我が県を代表する縄文時代前期～中期の集落遺跡として知られています。

現在、縄文時代中期後半の竪穴住居跡6軒と土坑40基を発掘調査しているところです。1号住居跡から見つかった石囲炉は、一辺が1mほどの四角形で、板状の石をはめた掘りごたつのような形をしています。隅には石棒のような角の丸い石を縦にはめ込んでおり、内面には焼土がきれいに残っていました。

また、囲まれた石材のヘリをふちどるように、煤（タール？）が付着していました。ごくまれにこうした事例はあるようですが、これまで原因はわかっていません。良好な資料のため、今後分析などをおこなって、究明していく予定です。

住居の中の炉は奥に寄っていて、手前側に埋甕がみられます。手前が住居の入口と思われます。

石棒状の石が配置された炉焼土を確認。

韮崎市の古墳時代の集落

韮崎市相垈交差点

現在、国道交差点改良のための発掘調査をおこなっている枇杷塚遺跡周辺は、韮崎市の塩川と七里が岩に挟まれており、塩川の氾濫によって肥えた土壌が出来上がり、古代より山梨の穀倉地帯として栄えてきました。さらに、調査地点近辺には、坂井堂の前遺跡や火雨塚古墳など古墳時代の遺跡をはじめ、さまざまな遺跡があり、縄文時代からこの地域で人々の生活がいとなまれてきたことがわかっています。

発掘によって地表面直下より近世の井戸跡や溝状遺構が確認され、深度約1mより古墳時代のものと思われる柱穴や土坑、土器片が複数発見されました。

これらの遺構・遺物は調査区北側を中心に出土しています。今回の調査地点より北側に位置する過去の韮崎市の調査地点では、古墳時代中期の竪穴住居二軒が見つかっています。今回の調査地は遺跡の南側縁辺部にあたり、古墳時代の集落は標高の高い北側に広がっていることが考えられます。

今回発掘された古墳時代前期の壺形土器の大型破片。

埋文センターのこだわり縄文土器レシピ

土器を焼こうとするとすぐ割れちゃう！そんなあなたのためにとっておきの土器づくりレシピを紹介しちゃいます。

材料（1個分）

①粘土（陶芸用） 1.3kg
②川砂 700g
手ぬぐい
竹べら
竹串
撚ったヒモ
薪 土器1個で一輪車1杯分
見本となる縄文土器

1のポイント
砂がみえなくなるまで粘土をよくこねること。

2のポイント
文様に惑わされないで、土器の器形を見極めて。あと、表面のつなぎ目は完全に消しましょう。

作り方

作り方
1. ①の粘土と②の砂をこねてよく混ぜ、生地を作ります。出来上がった生地は、絞った濡れ手ぬぐいとビニール袋につつんで粘土が乾燥しないように1週間ほど寝かせます。

2. 寝かせた生地で土器を作ります。まず、生地をお団子にしたら、円形に平たくつぶし、底をつくります。次に粘土で2㎝～3㎝幅のひもをつくり、輪っかにして積み上げます。つなぎ目が見えなくなるようにしっかりくっつけて下さい。

3. 土器の表面に文様をつけます。撚ったヒモや串、竹を半分に割った管をつかって、土器の文様を再現していきます。出来上がったら2週間ほど乾燥させます。

4. 乾燥させた土器を焼きます。半分の薪で火床を作ったあと、土器と残り半分の薪を投入して15分焼きます。十分さましたら、縄文土器のできあがりです。

3のポイント
文様に粘土ヒモを使う場合は、焼いた時に剥がれないようにしっかりくっつけて。

4のポイント
焼き上がりの最後に土器を寝かせて底を焼くのを忘れないように。

研究×埋活

埋文センター「縄文土器づくり」のこだわり

埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）では、県内小中学校への出前支援事業をおこなっています。

出前支援事業は、これまで埋文センターが調査・研究した成果や遺跡からの出土品などを学校教育の場で利用できるように開発した体験メニューです。

メニューのひとつ「縄文土器づくり体験」のこだわりは、本物の縄文土器をモデルに、児童・生徒のみなさんに本物そっくりに土器を作ってもらうことです。

縄文土器の特徴の一つは、「モデルそっくりにまねてつくる」こと。遠く離れた遺跡から、形も文様もそっくりの土器が発掘されています。これは土器の作り手達が自分の好きなデザインの土器を作ったのではなく、共通のお手本をまねて作ったことを意味します。

埋文センターの「縄文土器づくり」は、形を作り、好きな文様をつけるという縄文土器づくりの方法ではなく、これまでの縄文土器の研究の成果を活用して、縄文時代のルールにのっとってモデルとそっくりな土器を作ることにこだわっています。

↑小学校での縄文土器づくりの様子。
みなさん、何回も土器を手に取り、そのカタチを観察し、確認しながら作っています。

出前支援事業で土器の類似性について説明する職員。

ホンモノそっくりですね。

特集
江戸時代甲府の「水」に迫る！

江戸時代、甲府は、甲府城を中心とした水の町でした。一の堀、二の堀、三の堀、そして甲府城下町を潤した甲府上水。今は、そのほとんどが、土地利用の変化により埋め立てられています。埋蔵文化財の発掘調査により、時々、その貌を現代のわたしたちにつかの間みせてくれます。今回は、平成29年度におこなわれた最新の発掘調査から、「水」に関わる2つの遺跡を紹介します。

今回の調査地点は甲府城下町遺跡の中でも「武家地」の範囲にあたります。西側には「二の堀」が南北に走っており、南側には「青沼町口」をとおって城外へと通じる道が西へ延びていました。いわば城下町の出入り口の脇にあたります。18世紀以降の絵図では「御米蔵」と描かれています。

今回の調査では、江戸時代の集水枡や水路、暗渠など、石で築かれた水に関わる遺構が多く確認されました。

甲府城下町遺跡周辺は、現在では平坦に見えますが、実は北から南にかけて傾斜しています。当然、雨水や地下水も傾斜に沿って流れてくるため、排水する必要があります。

これらの遺構は、この排水に関わるもので、複数の遺構の存在から、排水の方法を何度も変更していたことが明らかになりました。おそらくは町づくりの中で、その時期ごとに都合の良いように、作り替えていたと考えられます。

水の処理に苦慮する、江戸時代の人々の苦労がうかがえます。

二の堀近くの水利遺構発見される！

甲府市橘児童公園東側公用車駐車場予定地

集水枡（手前）と暗渠（奥）。

武家屋敷の井戸

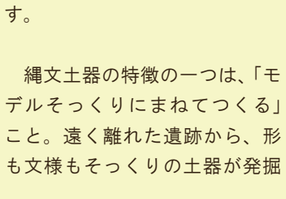
甲府駅南口信玄公像前広場

甲府駅南口、武田信玄公像の目の前に、山梨の山紫水明を表現した水景施設が造られます。この建設に先だち、平成29年4月に発掘調査がおこなわれました。この地点は、18世紀初頭の甲府城主柳沢吉保の筆頭家老柳沢権太夫の屋敷があったと考えられている地点です。

今回、20㎡と狭い区画でしたが、多数の土坑や素掘りの井戸が発掘されました。

調査区西隣の駐輪場からは2基の井戸、更にその西側では中世から近代までの12基の井戸が発掘されています。

甲府は、良質の井戸水が得られにくい土地柄で、一連の発掘調査を通じて、同じ屋敷内から多数の井戸が発掘されたことは、武家屋敷の立地と水資源の利用を考える上での興味深い発見といえます。


右側の大きい穴が今回発見された井戸。